

『ながたび。』

中内こもる

《プロローグ》

◆登場人物

男 1

男 2

音楽。

舞台上に椅子を並べる男1。

やってきて椅子に座る男2。

男1、紙とペンを手に、何か描きだす。

じつと座っている男2だが、男1の方を気にしている。

やがて完成し、紙を男2に見せる男1。

照れくさそうな男2、ご満悦の男1。

音楽の終わりと共に、

暗転

『内見』

◆登場人物

男 1

男 2

一軒家の中。

正面に大きな窓。

内見に来た風な男1と、不動産屋風な男2

男 1 いやーいいっすね。

男 2 いいですよね。

男 1 この窓からの眺めもなんかいいっすもんね。

男 2 そうですよね。

男 1 まずここに、こういう大きな窓があるのがいいですよね。

男 2 ええ。

男 1 憧れありましたもの。自宅に、このサイズの窓。

男 2 わかります。

男 1 いいなあ。

男2 良かったら、開けてみますか？

男1 え？

男2 窓。

男1 いいんですか？

男2 もちろん。

男1 じゃあ、お言葉に甘えて。

男2 どうぞどうぞ。

男1 それじゃあ：開けます！

男1、大きな窓を開ける。

男1 おお：。

男2 良い風でしょ。

男1 はい。

男2 風通し良いんですよ。

男1 ですね：あっちなんか賑やかですね。

男2 市民球場があるので、それですかね。

男1 あ、野球かなんか、試合してるんですかね。

男2 かも、しれませんか。

男1 いったすね。僕、野球好きなんて。
男2 お好きですか。
男1 好きです？野球。
男2 私はそこまでは：すいません。
男1 ああ、いえいえ。あの、近くにスーパー銭湯とかありますかね。
男2 え？
男1 あ、僕いまサウナにハマってて。近くにあったりしないかなって。
男2 ありますよ。スーパー銭湯。
男1 マジすか。
男2 2軒。
男1 2軒！？
男2 1軒は岩盤浴もあって、もう1軒はロウリュウのサービスありますよ。
男1 ロウリュウ！
男2 おススメはロウリュウある方です。
男1 え？え？もしかして。
男2 私も好きです。サウナ。
男1 マジですか！え？どの辺ですか？
男2 ここ来るときに通った商店街に、スーパーありましたよね。
男1 はい。

男2 あれを、ここと反対側に進んですぐです。

男1 近い！

男2 もうー軒はちょっと距離ありますけど、自転車ならすぐです。

男1 いやちよっと、どっちも行きたいっすね。

男2 ぜひ。

男1 うわうわうわ。もうこれ決めちゃおっかな。

男2 ありがとうございます。

男1 ああ、いやでも。待って下さい。さすがに僕一人だと決められないんで。

男2 それはもう、ええ。

男1 すいません。本当は奥さんも一緒に来るはずだったのに。

男2 いえいえ、それはもう仕方ないですから。

男1 いやでもいいなあ：え？ほんとにあの値段なんですよね？

この立地で、この間取りで、この窓で、あの値段って。

男2 はい。

男1 いや、すごいな。

男2 掘り出し物だと思いますよ。

男1 ですよ。

男2 どうでしょう。もちろん最終決定は奥様ともお話しして頂くとして、

一旦、仮押さえしておくというのは。

男 1　　そういう事もできるんですか。

男 2　　はい。

男 1　　やっといた方がいいですかね。仮押さえ的なやつ。

男 2　　正直な話。この物件ですと、他にも欲しいという方が、

男 1　　ですよねー！

男 2　　ええ。

男 1　　うわー、どうしよ。押さえちやおうかなあ。仮に。

男 2　　押さええますか？

男 1　　その方がいいですかね？

男 2　　他に問い合わせがあった場合、止めておく、という事がちょっとできないの

で。

男 1　　じゃあ、仮で！

男 2　　では、仮で。

男 1　　最終的に、無しって事もありませんよ？

男 2　　仮ですから。

男 1　　じゃあ、仮でお願いします。

男 2　　ありがとうございます。

男 1　　まだ仮で申し訳ないですけど。

男 2　　いえいえ。

男1 さっきから、カリカリカリカリ申し訳ないです。

男2 なんかハムスターみたいですね。

男1 え？

男2 でも本当にここはおススメですよ。

男1 いや本当そうだと思います。

男2 程良く高台ですし、小学校や病院も近いですから、将来的な事を考えても良いと思いますよ。

男1 決めちやおっかなあ。

男2 そこは奥様とも話して頂いて。

男1 ですね。でも絶対気に入ると思います。

男2 あと気になる事ありますか？

男1 そうですね。いや、大丈夫だと思います。

男2 わかりました。

男1 今日はありがとうございます。もう、僕の中ではほぼほぼ決まっていますので。

男2 ありがとうございます。あ、でも地下室の扉だけは開けないで下さいね。

男1 え？

男2 あちらの部屋の、古い地下室の扉だけは開けないで下さいね。

男1 ……ん？

男 2

入居されても。

男 1

え？なんですか？地下室あるんですか？

男 2

あります。でも開けないで下さいね。

男 1

何を？

男 2

古い地下室の扉を。

男 1

え？

男 2

まあ、開けないと思いますけど。

男 1

え？え？

男 2

（家から）出ましようか。

男 1

ちよ、ちよっと待って下さい。あの、地下室とかあるって聞いてませんけど。

男 2

ええ、特にお伝えは：してないですね。

男 1

んん？

男 2

まあでも、どうせ、開けちゃいけないわけですから。関係ないですよね。

男 1

いやいやいや。え？結構重要じゃないですか？「地下室がある」って。

男 2

そう：ですかね？

男 1

じゃないですか？だって、もう一部屋あるって事でしょ？

男 2

いやでも、使えませんから。

男 1

え？

男 2

開けちゃだめなんだから。

男 1 え？住むことになっても、開けちゃダメなんですか？
男 2 そう、ですね。開けちゃダメですね。
男 1 どうして？
男 2 ダメだからです。
男 1 …は？
男 2 あの、赤信号ありますよね。
男 1 え？
男 2 赤信号は、渡っちゃダメですよね。
男 1 …はい。
男 2 未成年はお酒飲んじゃダメですよね。
男 1 …はい。
男 2 古い地下室の扉は開けちゃダメです。
男 1 はい？
男 2 そういう事です。
男 1 いやいやいや、同列ではないですよ。赤信号と未成年飲酒と地下室は！
男 2 勿論、わかりやすく例を出しただけです：
男 1 わかりやすいかなー？
男 2 ともかく、古い地下室の扉は：
男 1 あの、さっきから「古い」地下室って言ってますけど、

男2 はい。
男1 ここ、新築の建売ですよね。
男2 はい。
男1 なんですか？「古い」地下室って：
男2 あ、（近づきながら）はいはいはいはい。
男1 え？え？なんで近づいてくるんですか？
男2 地下室だけは、以前からあったものなんです。
男1 え？
男2 このお家は新築ですけど、地下室は以前の物件の時からあったんです。
男1 え？
男2 はい。
男1 じゃあ、前のお家を取り壊して、地下室だけ残して、新しく家を建てたって
事ですか？
男2 9割そういう事です。
男1 あと1割は？
男2 だから、古い地下室なんです。
男1 そういうのって、新築って言っているんですか？
男2 いい、んじゃないですかね？
男1 曖昧なの駄目じゃないですか？え？ここがお値打ちなのって、そういう事？

男2 それは何とも。

男1 いや、なんとか言ってもらわないと。

男2 まあでも大丈夫ですよ。

男1 何が？

男2 そもそも、開けてみようって気にならないと思います。地下室。

男1 …。

男2 ましてや、入ってみようなんて。

男1 どうしてですか？

男2 まあ、見てもらえばわかると思いますが…いやわかるっていうか、なんだろう？

男1 「あ、これは開けてはいけないな」って思ってもらえると思います。

男1 どういう事ですか？

男2 まあ、見てもらえれば。

男1 何か、事故物件的なあれですか？

男2 え？

男1 霊的なあれですか？

男2 いや、そういうのは無いと思います。

男1 「そういうのはない」？

男2 と、思いますよ。

男1 進行形ですか？

男 2 え？
男 1 現在進行形で、何か入ってるんですか？
男 2 はい？
男 1 地下室に、何か入ってるんですか？
男 2 落ち着いて下さい。
男 1 入ってるんですか？
男 2 入っていないというか、
男 1 入っていないと言ってくれ。
男 2 入っている、というよりはですね、
男 1 入っていないと言ってくれ！ハッキリと言ってくれ！
男 2 もちやもちや言うな！
男 1 入っているとと言うよりは：いる？
男 2 あー！
男 1 あまり大きな声は、
男 2 どういう事？
男 1 近所迷惑ですよ。
男 2 地下室に何がいますか？
男 1 ここから先は、もう不動産屋さんと話して下さい。
男 2 ：は？

男2 その方が、きっと、お互いのためです。

男1 …

男2 それでは、失礼します。あ、奥様のお父様の体調、早く良くなると良いですね。

男1 …

男2 では。

男2、出て行く。

男1 あいつ誰だ！え？不動産屋さんじゃ、ないの？え？え？

大きな重い扉を開ける音がする。

男1 え？

扉が閉まる音。

男1 あいつ地下室入ってた！絶対地下室入ってた！いる！

あいつだ！この地下室には、あいつがいる！

え？今日俺が一人でここに来たの、かみさんのお父さんが体調悪くなったからって、
言っていないよな？なんで？なんであいつ知ってるの？

急に男2入ってくる。

男2 あの

男1 わー！ビビったー！

男2 良かったら今からサウナー一緒に行きます？

男1 はあ！？それは行こうかな。

『ガチガチ』

◆登場人物

男1（客）

男2（店員、ナレーション、勇者）

地下街にあったりするクイックマッサージ店
マッサージ用の椅子（普通の椅子で代用も可）

普通に座っている男1

タオルを持って見ている男2

男2 あ、逆です。

男1 え？

男2 すいません。座る方向が。逆です。

男1 え？

男2 （背もたれ側）をこっちが前です。

男1 あ、こうですか。

男2　　そうです。そうです。
男1　　すいません。初めて来たもので。
男2　　いえいえ。肩にタオル、掛けますね。
男1　　はい。
男2　　では、10分の肩コリ解消コース。始めさせて頂きます。
（タイマーを押す）
男1　　お願いします。

男2、男1にマッサージを始める。

男1　　うー
男2　　あ、強かったですか？
男1　　いえ、大丈夫です。
男2　　力加減強すぎる弱すぎるあればすぐ言ってくださいね。
男1　　はい。うー。
男2　　これ、かなり凝ってますねえ。
男1　　もう凝り過ぎて気持ち悪くなっちゃって。
男2　　これだけ凝ってればねえ。
男1　　やっぱり凝ってますか？

男2 ガチガチですよ。ガチガチ。これだけ凝ると気持ち悪くなるでしょうね。

男1 そうなんです。

男2 揉んでても気持ち悪いですもん。

男1 ああー……ん？（気持ち悪い？）

男2 人間の体とは思えない。

男1 ええ？

男2 （溜息）はあー……ダメですよ。

男1 え？

男2 こんなになるまでほっておいたら。

男1 あ：すいません。

男2 楽になるよう頑張りますね。

男1 お願いします。

男2 ここ、どうですか？痛いですか？

男1 ああ、ちよっと、そうですね。

男2 ここの芯のところが凝ってるんですよね。

男1 ああ。

男2 ここの、芯の凝りが、ほぐれると、いいんですよね。

男1 なんとかかりますか？

男2 うーん…。

男1 ダメなの？

男2 なにしろクイックマッサージなので。

男1 ああ。

男2 頑張りますけどね。なにぶんクイックなので。

男1 10分だと厳しいですか。

男2 うーん。ほんとは半日欲しい所ですね。

男1 そんなに。

男2 芯の、芯の、芯の部分なので。

男1 そんなに。

男2 骨まで行ってますね。

男1 骨。

男2 ちょっと大袈裟ですけど。

男1 ですよ。

男2 普段運動とかされます？

男1 いやあ全然。

男2 何かされた方がいいですよ。血行良くしないと、根本的に良くなりません

男1 から肩凝りは。

男1 うーん。なかなか時間もなくて。

男2 お忙しいとねえ。

男1 やっぱリウォーキングとかが良いんですかね。

男2 うーん。ヒップホップとかどうですか？

男1 え？

男2 ヒップホップダンス。

男1 え？

男2 僕最近始めたんですよ。

男1 え？

男2 もうやめようと思ってますけど。

男1 え？

男2 ちょっと、合わなくて、音楽性が。

男1 え？

男2 新しい事始めてみるの良いんじゃないですか？春ですし。

男1 ああ。

男2 ここにも初めて来られましたよね？そういう一歩踏み出す、みたいなのが大事だと思えますよ。

男1 そうか。

男2 そうですよ。ちょっと頭の方もやっておきますね。

男1 頭？

男2 ヘッドマッサージです。頭の凝りも肩に影響するので。

男1 あ、はい。お願いします。

男2 失礼しまーす。

男2、男1の肩にかけてあったタオルを頭にかぶせる。男1の顔は客席に見えなくなる。簡易のヘッドマッサージを施す。

男2 カ加減どうですか？

男1 あ、丁度いいです。

男2 はーい。

男2、ヘッドマッサージを続ける。

眠くなってくる男1、一つ大きく息。

やがて薄く、どこか不安な気持ちになる音楽がかかってくる。

ヒップホップだ。2人には聞こえていない。

男1、詰まったような息を一つ、腕をダラリ。

男2 お客さん？

男1 (反応なし)

男2 あれ？大丈夫ですか？お客さん？お客さん？

：やばい！

慌てて施術室を飛び出す男2

ヒップホップの音量が大きくなり、照明も激しく変わる。

椅子に座ったままの男1に光。突然ナレーションが

ナレ 『肩凝りがひどい中年男性がファンタジー世界に異世界転生して

世界を救う件』

髪飾りをつけたり、いかにもな剣を持った勇者が登場。

勇者 でやー！

ワンポーズ決めて。

勇者 やった！言い伝えの通りだ！月と太陽交わる時、異世界より魔の者を退け世界を救う救世主れる。魔王！これでお前も終わりだ！
(男1に話し掛ける) 救世主様！

魔王が炎を吐く（S E）。

勇者 危ない！（男―を庇う）諦めろ！魔王！

何か男―に飛んでくるが勇者が全て剣で弾き落とす（S E）

勇者 無駄だ！剣よ！魔を貫け！

剣から何か発射されて魔王を攻撃する（S E）

魔王が炎を吐く（S E）

勇者 危ない！（男―を庇う）焦っているようだな。魔王！

何か男―に飛んでくるが勇者が全て剣で弾き落とす（S E）

勇者 さっきから狙いが全て救世主様だ：つまりお前も何かを感じ取っているということだろう：この人を放っておいてはマズいと。そうだろう！魔王！

炎を転がって躲す勇者。

勇者　　こうなる前に！さっさと私を倒しておけば良かったな！

飛んでくる何かを転がって躲す勇者。

勇者　　ここまで放っておいたらもう！手遅れだ！…危ない！

男一に向けて飛んできた何かを弾くが、最後の一本が刺さってしまふ。

勇者　　う！…く…まだだ！こんな攻撃、俺の芯の、芯の、芯の部分には届いていない。骨まではいっていない！

反撃で剣を一閃。魔王の悲鳴が響く。

何かが飛んでくる、弾く勇者。

男一の背中側にも混じって弾く。

何本か勇者に刺さる。

思わず、男一の正面に回る。

勇者　　うう！しまった！

男一に魔王が飛ばした何かが迫る。庇おうとする勇者。

(ストップモーション?)が、間に合わない。

「キン!」という男と共に男一の肩が飛んできた何かを弾く。

勇者 え!:(男一の肩を触って)ガチガチだ!なんだこれは!とても人

間の体とは思えない。これなら!うおおお!

失礼しまーす

男一を椅子ごと回転させ、正面に背中を向かせ、その後ろに隠れる勇者。

魔王が飛ばした何かを全て男一の背中で防御する。

「キン!」という音が延々と響く。

魔王の隙を見て。

勇者 お前の弱点:頭だ!でやあー!

炸裂音、魔王の悲鳴。

勇者 やった:やった:救世主様のお陰で世界は救われた:!

ヒップホップがかかる。

勇者、男1を椅子ごと回転させて元の向きへ。

勇者、ウキウキと出て行く。

ヒップホップ盛り上がる。

照明変化。

男2、出てくる。

男1の肩を叩く。

男1 お客さん、お客さん。終わりましたよ。

男2 あ、ああ：ありがとうございます。

男1 少しはスッキリしましたか？

男3 あー：（肩を回したり、正直イマイチの感触だが）：はい。

『玉』

◆登場人物

男 1

男 2

部屋。

男 1、けん玉を持ち真剣な顔。

男 2 見ている。

男 1、精神統一し、タイミングをさぐっている。
今まさに、球を繰ろうとしたその時。

男 2 ストップ！

男 1 ……！

男 2、男 1 にけん玉を持たせたまま、球に繋がる糸をピンと張り、
「よし」と頷く。

男 1
∴

男 2
せーの

男 1
(え?)

男 2
せーの

男 1
(え?)

男 2
せーの

男 1
待って待って。

男 2
∴

男 1
∴こっちのタイミングで(やらせて)

男 2
(小刻みに頷く)

男 1
∴

男 1、精神統一し、タイミングをさぐっている。
今まさに、球を繰ろうとしたその時。

男 2
ストップ!

男 1
∴!

男 2、けん玉の糸をピンと張り、「よし」と頷く。

男 2		男 2	男 1	男 2	男 1	男 2	男 1	男 2	男 1	男 2	男 1	男 2	男 1	男 2	男 1
せーの	男 2、けん玉の糸をピンと張り、「よし」と頷く。	！	ストップ！	(行くぞ)	：	：	(小刻みに頷く)	それは、ちよつと無理だから。	：	待って待って。	せーの	(え？)	せーの	(え？)	せーの

男 1
∴

男 2
せーの

男 1
∴

男 2
せーの∴あ！

男 2
けん玉の糸をピンと張る。「よし」と頷く。

男 1
∴いい？

男 2
(小刻みに頷く)

男 1、もう精神統一とかしないで、

またストップかけるんじゃないやねえだろうな？と警戒する。

男 2、微動だにせずけん玉を見ている。

男 1、それを受け、それじゃあと球を繰ろうとしたその時。

男 2
ストップ！

男 1
！！

男 2、けん玉の糸をピンと張る

男1 これなんなの？
男2 よし。
男1 よし、じゃなくて。
男2 あ、(もう一度ピンと張る)
男1 何？

男2、手で(どうぞ)と促す。

男1 あのさ、こっちのタイミングじゃないと難しいから。
男2 (小刻みに頷く)
男1 わかってるんだよね？
男2 (深く頷く)
男1 じゃあ、こっちのタイミングでいくからね？
男2 (手で「どうぞ」)
男1 ……(いくぞ)
男2 セーの
男1 だから！
男2 ……
男1 「セーの」やめて！無理だから！こっちのタイミングじゃないと！

なんで「せーの」って言うの？

男2、けん玉の糸をピンと張る

男1 行けないって！ピンと張っても！

男2 (一回納得するが、やはりすぐ戻ってもう一度ピンと張る)
何が？何にこだわってんの？

男2 (手で「どうぞ」)

男1 どうぞ、じゃないんだよ。

男2 ∴休憩しますか。

男1 は？

男2 ちよっと、休憩しましょうか。ちよっと集中が、

男1 誰のせいだと、

男2 休憩！

男1 いいよ。君、休憩しなよ。その間にやるから。

男2 あ、じゃあ。

男1 うん。やるから。

男2 あ(糸をピンとする)

男1 だからやめてそれ！なんなの？

男 2 (手で「どうぞ」)
男 1 いやもう休んでなって。
男 2 いや、大丈夫です。
男 1 こっちが大丈夫じゃないから！
男 2 じゃあ休憩を。
男 1 いいってば！君が、休んで。
男 2 大丈夫なんで。
男 1 じゃあいいよ！そこで見てて！見てるだけでいいから！
男 2 はい。
男 1 何もしなくていいから！ね！やるから！
男 2 (細かく頷く)
男 1 何もするなよ。
男 2 ∴
男 1 ほんとに、
男 2 ∴
男 1 (深呼吸) ふー∴
男 2 せいの
男 1 言うなってば！
男 2 え？

男1 言っただろ！今！せーのって！

男2 え？

男1 言ってもやらないから！君の「せーの」のタイミングでは！だから言うなよ！

男2 ……言ってますか？

男1 ……おい。

男2 言ってますか？

男1 嘘だろ。

男2 言ってますか？

男1 言ってるよ……？

男2 (自信持って)言ってます。

男1 なんだよ！

男2 言います。

男1 言うなよ！

思わず殴るような素振りでけん玉を振り上げる男1

男2 それは絶対にダメです！

男1 ……。

男 2 わかっているでしょ？
 男 1 ː
 男 2 ダメです。
 男 1 ː
 男 2 おろして下さい。せーの
 男 1 (降ろす)
 男 2 (にっこり)できるじゃないですか。
 男 1 あああああ！
 男 2 今のタイミングで行きましょう！せーの！
 男 1 無理だよ！
 男 2 あ(糸をピンとする)
 男 1 もうそれやめろって！
 男 2 せーの
 男 1 言ってる、それ。でもやらないから。できないし。無駄だから。
 男 2 せーの
 男 1 関係ない。
 男 2 せーの
 男 1 無視。
 男 2 せーの

男 1 こっちのタイミングで行く。

男 2 セーの

男 1 :

男 2 セーの

男 1 :

男 2 セーの

男 1 うるさいな！

男 1、男 2 に近づいてけん玉を渡そうとし、

男 1 もう、君がやればいいだろ！

男 2 (驚いた表情)

男 1 やりなよ君が。

男 2 (細かく首を振る)

男 1 なんで？

男 2 (小声) それは

男 1 は？

男 2 (小声) それは

男 1 は？

男2 (大声) 話が違ってくるでしょうが！それは！

男1 !

男2 ∴

男1 ∴はい。

男2 (細かく頷く)

男1 ∴

男2 やりましょう。

男1 え？

男2 やりましょう。できますよ。きっと。

男1 ∴

男2 自信持って下さい。

男1 え？

男2 自信持って。大丈夫。

男1 ∴。

男2、ポケットから小さなテープを取り出して小さくちぎって口に貼る。

男1 え？

男2 (親指を立てる、後手を後ろに組む)

男1 言わないんだな…（よし）

男2、手を後ろに組んだまま、はけていく。

男1 （男2がどこかへ行くので）え？あれ？

男2、戻ってくる。後ろ手に持っていたけん玉を見せる。

男1 え？

男2 （にっこり）

男1 （一緒にやるのか、と解釈して、頷く）

男2、持ってきたけん玉を男1に渡す。

男1 え？え？え？

男1、両手にけん玉。

男2、口のテープを剥がす。

男 1 え？

男 2 ……（近づいてくる）

男 1 やめろ…やめろ…

男 2 （両方の糸をピンとする）

男 1 あー！

男 2 せーの

男 1 無理！

男 2 せーの

男 1 無理！

男 2 せーの

男 1 尚更無理！

男 2、すばやくまたテープを口に貼って、後ろ手。
期待の眼差しで見つめる。

男 1 ええ…（一応やってみようとする）いや無理！無理だよ！一個でもどうかなの！

男 2 （手を出す）

男 1 え？

男2 (手を出す)
男1 (けん玉を1個渡す)
男2 (もらったけん玉の糸をピンとして：床に置く)
男1 置いた。

男2、その場に体育座り。
手で「どうぞ」

男1 え？
男2 (手で「どうぞ」)
男1 いいんだな。
男2 (ゆっくり頷く)
男1 こっちの、タイミングで。
男2 (ゆっくり頷く)
男1 よし：(糸をピンとする)
男2 (「そうそう」という感じで頷く)

男1、精神統一。

男1 ふー…

意を決して、ついに挑戦するその時。

男2 (録音)「せーの」「せーの」

男1 ……テレパシーやめろ。

男2 (にっこり)

男1 ……は！

男1、けん玉挑戦。(できれば成功が望ましいが)成功しても、失敗しても、2人のリアクションを見せて、暗転。

『難問』

◆登場人物

医者

患者

病院の診察室。

患者が語り出す。

患者　ずっと夢の中にいる気がするんです。この夢ってというのは、

「野球選手になりたい」とか「マンガ家になりたい」とか「宝くじ当たれ」とか、そういう類のものではなくて、夜寝ている時に見る夢です。今朝も母に起こされて、母の作った朝食を食べて、仕事に行き、

上司に小言を言われ、それからこうして先生と話をしています。

身の周りに起こっている事に実感はあります。でも、なんとなく、

本当の自分はまだ眠っていて、いや、本当の自分ってというのが

この僕自身なのかどうかも怪しくて、もしかしてこの世界は僕じゃない誰かが見ている夢で、僕はずっとその中にいる只の登場人物なのかもしれない……そんな気がしてるんです。ずっと。

医者 田所さん

患者 はい。

医者 ここね、皮膚科なんですよ。

患者 ……。

医者 ……。

患者 え？

医者 いや、

患者 ずっと、夢の中に、

医者 いや、言ってる事はわかるんですよ。でもね、

患者 はい。

医者 私が「どうしました？」って聞いたのは、そういう事ではないんです。皮膚科

だから。聞きたいのは、皮膚に関する事。皮膚に関する「どうしました？」が聞きた
いんです。皮膚科だから。

患者 ……

医者 ……

患者 （首のあたり）ここが痒いんです。

医者 赤くなってる。掻いたでしょ。

患者 はい。

医者 あせもですね。この時期大人も子供も多いですよ。温かくなってきた、汗か

くから。塗り薬出しておきますね。お風呂入った後塗って下さい。
お大事に。

患者 ああ。

医者 まだ何か？

患者 この痒さも、本当は夢なんじゃないかって思うんです。

医者 でも薬は塗りましようね。実際痒いんでしょ？赤くなってるし。

患者 先生は馬鹿か！

医者 なんですか藪から棒に。

患者 それとも賢いのですか！？

医者 あ、質問？勢いすごいから糾弾されてるのかと思っちゃった。

患者 どっちですか？

医者 まあ自分で言うとおれですけど、一定レベル賢いとは思いますがよ。

大学出てるし。

患者 それは専門学校卒の僕へのあてつけですか？

医者 考えすぎです。

患者 でもわざわざ大卒とか言うのは余計な情報じゃないですか？

医者 軽率でした。

患者 なんなんですか先生？この感覚は？僕はおかしいのでしょうか？

医者 どうしても不安でしたら、専門的な医療機関を受信すべきだと思いますが、

考えすぎるのも良くないですよ。私もね、無くはないですから。そういう感覚。

患者 先生もですか？

医者 ええ。同じウエイトでそう感じているかはわかりませんが、そういう感覚は結構誰しもあります。

患者 じゃあ先生はどうやってこの感覚を克服しているんですか？合法ストレスなドラッグですか？

医者 なんて事言うんですか？

患者 塗りドラッグですか？

医者 塗り薬みたいに言わんでください。

患者 今日処方してもらおうドラッグを、

医者 塗り薬ね。

患者 それを塗ればこの感覚は治りますか？

医者 首の痒いのが治りますよ。お大事に。

患者 でも先生、もしかして、もしかしてですよ。

医者 全然出て行かないなあこの人。

患者 もしもこれが、この世界が、僕か、あるいは誰かの見ている夢だとしたら、それに気付いているのってすごいことじゃないですか？

医者 ……明晰夢ですね。

患者 めいせきむ？

医者 夢の中で、「これは夢だ」と自覚しながら見る夢の事ですよ。

中には自由に明晰夢を見て楽しんでいる人もいるとかなんとか。

患者 夢の中なら、何でもやりたい放題って事ですか？

医者 本当に夢だったらね。

患者 受付にいたお姉さんに、この後診察料を払うついでに余計な事しても良いって事ですか？

医者 なんですか余計な事って。

患者 する必要の無い事ですよ。

医者 必要の無い事はしないで下さい。

患者 先生も同じ感覚があるって言ってましたよね？

医者 私はあなたみたいなのは思ってます。

患者 ああ！でも怖い！

医者 私もです。

患者 夢だと思って好き勝手して、本当は夢じゃなかったら、僕はどうなる？そんなの、終わりじゃないか。

医者 診察は終わりましたからね。

患者 何しても大丈夫ですか？

医者 夢ならね。あなたの夢ならご自由にですけど。

患者 夢だって言ってくれ。

医者　私が決めることじゃないでしょう。

患者　これが夢なら、夢だという確信が欲しい。

医者　トイレに行けばいいんじゃないですか？

患者　え？

医者　ほら、よく夢の中でトイレに行くとオネシヨする、なんて言うじゃないです

か。トイレ行けばわかるんじゃないですか。夢かどうか。

患者　（嬉しそう）僕にここで失禁しろって言うんですか？

医者　トイレ行けて言ってるだろ。なんで嬉しそうなんだ。

患者　ちよっと待ってて下さいね。

医者　いや戻ってこなくても良いですから。

患者　結果気にならないんですか？

医者　なりません。

患者　これが夢なら、あなたも消えてしまうかもしれないですよ？

医者　その時はその時です。

患者　後悔の無い生き方をしてるんですね。

医者　後悔の無い生き方なんてありません。

患者　かっこいい。それ大学で習ったんですか？

医者　めんどくさいな。そうです。

患者　先生、嘘はやめて下さい。

医者 すいません。

患者 僕の余命はあとどれくらいなんですか？

医者 正直考えた事もなかったです。

患者 無責任すぎませんか？

医者 あせもでそこまでの責任は持てません。

患者 (モジモジ)あの、僕オシッコに行きたいんですけど。

医者 完全にもよおしてるじゃないですか。早く行って下さい。

患者 ああでも、不安だ。

医者 何がですか。

患者 トイレ行ってオシッコなんかしたら、後から「お前ほんとはウンコしてたただろ？」「病院でウンコしただろ」ってからかわれるんじゃないかと不安になってきた。

そうだったら「ウンコマン」というあだ名をつけられるに決まってる。

医者 つけませんよ。小学生じゃあるまいし。

患者 いえ、先生ではなく、横川と堀内にです。

医者 え？誰ですか？

患者 中学の同級生の横川と、高校の同級生の堀口です。

さっき待合室に偶然いて、2人で話掛けて来てくれて、おお、何年ぶりだ？とか言
って。楽しかったなあ。(憎々しげに) あいつらはきつと、私の事を「ウンコマン」
と呼ぶに決まっています。

医者 それこそないでしょ。もう大人なんですから。

患者 先生は横川と堀内の何も知らないからそういう事が言えるんです。

医者 楽しく話してたんでしょ？

患者 ああ、どうして待合で偶然にも横川と堀内に再会してしまったんだ。

医者 すごい偶然ですね。幼馴染3人が再会なんて。

患者 そんなはずないんですけどね。

医者 え？

患者 私は高校を卒業して、専門学校に入るために地元からこっちに出てきたので、

地元に残った横川と堀内とこの病院で会うはずが無いんですよ。

医者 …。

患者 そもそも、横川と堀内は面識が無いはずだし。

医者 これ、夢なんじゃないですか？

患者 え？

医者 いや、本当はここにいるはずの無い人がいたり、接点がないはずの人達が仲良くしてる感じ、これ夢でよくあるやつですよ。

患者 夢…？

医者 良かったですね。なんでも自由にできますよ。

患者 無責任なこと言わないでください！

医者 ええ？

患者 他人事だと思って！なんでも自由に？それでももし夢じゃなかった場合、先生は僕に最高の弁護士を紹介してくれてその費用を肩代わりする覚悟はあるんですか？

医者 どうして逮捕される前提の事をしようとしてるんですか。

LINEの着信音

患者 あ、横川と堀内と私のグループにメッセージが。

医者 グループLINE作ったんですか？

患者 作ってないです。

医者 じゃあ夢だよ。

患者 横川「田所、早まるな」

医者 ん？

患者 「よく考えた方がいいぞ」堀内「そうだ、これが夢か現実か、よく考えて行動しろ」：（打ちながら）「ありがとう」の、ちいかわのスタンプ。

医者 もう夢ですよこれ。夢でないならありえない会話なもの。

患者 先生はそれでいいんですか？

医者 だって夢なもの。

患者 そうだったとして、自分が消えてしまうかもしれないんですよ。

医者 なるようにしかありません。

患者 どうしてそんなに冷静なんですか？

医者 どうして消えると決めつけるんですか？

患者 え？

医者 これは、私の夢だという可能性だってあるでしょ？

患者 先生の：夢？

医者 その場合、消えるのはあなただけですよね。

患者 いやだ、僕は消えたくない。

医者 田所さん。とは言えですよ、これが誰の夢なのかは私にもわかりません。私の夢なのか、あなたの夢なのか、消えるのはあなたなのか、私なのか？ここでこうしていても、誰にもわかりません。いつ消えるのか？すぐなのか？もっと先なのか？
：でもこれって、夢でも現実でも、一緒じゃないですか？

患者 確かに。

医者 ね。

患者 先生、結局僕はどうすればいいのでしょうか？

医者 お好きなように。

患者 汗をかいたら、また塗り直した方がいいですか？

医者 え？あ、塗り薬の話？ええ、そうですね。一回ウェットティッシュか何かで拭いてまた塗って下さい。

患者 はい。ありがとうございます。とりあえず、横川と堀内と、飲みに行こうと思います。

医者 いいですね。お大事に。
患者 はい。それじゃあ：

患者、怪しい笑みを残して診察室を出て行く。
医者、椅子に座って。

医者 ……ひ・ふ・か？皮膚科？私が？（周りを見渡す）…いつから？
…ほったたをつねる。…痛い。あ、じゃあこれ現実か。
…こわ！

◆登場人物

男

今野 小学校教師

スーパーマーケットのバックヤード

パイプ椅子に男が元気なく座っている。

対面に、もう一つパイプ椅子が。

今野がカバンを持って急いでやってくる。

(見えないが)店員と話す。

今野 すいません。はい、そうです電話を頂いた：

(男の座っている方を見て)はい：そうですね。うちの(生徒です)：

あの万引きしたっていうのは(本当に?)：そうですねか：

申し訳ありません。：あの、ちょっと話をしてもいいですか？

ありがとうございます。

(向き直り) いい? 座って?

今野、対面のパイプ椅子に座る。

今野 あかね、初めての事だし、きちんと指導してくれるなら、警察には：
てお店の人は言ってくれてる。

男、ゆっくりと頷く。

今野 まずさ、謝った? お店の人に。

男 :

今野 まだ?

男 :

今野 まだなんだな。

男 :

今野 やった事はさ、良くない事だから。まず、謝らないと。

男 :

今野 (立ち上がって店員に) 本当に申し訳ありません…。

勿論、謝れば許されるという事ではないですが、でも…

男も立ち上がって店員に。

男
ごめんなさい。

今野
：

男
ごめんなさい。

今野
：

男
本当に申し訳ありません。

今野
：あの、黙っててもらえる？

男
え？あ、いやでも、

今野
関係ないから。

男
：

今野
関係無いでしょ？

男
：

今野
いま、俺と生徒の問題だから。黙ってて。背後霊は。

男
：はい。

男、座る。

今野 はい？あ、すいません、できれば：ありがとうございます。

店員、2人にしてくれるようで、扉が閉まる音がする。

今野、見送った後。生徒（の座っている方）へ向けて。

今野 先生と、話できるかな？

男 （チラと隣を見る）

今野 ね。

男 …

今野 ね。

男 薫くん：

今野 ね。

男 薫くん。

今野 ね。

男 薫くん！！

今野 ちよい

男 え。

今野 やめて？

男 はい？

今野 男 その、やめてくれる？こっちよりテンション上げていくの。
今野 男 あ、はい。
今野 男 徐々にやってこうと思ってるのよ。こっちは、
今野 男 あ、
今野 男 ゴチャゴチャするでしょ。
今野 男 ゴチャゴチャ：
今野 男 でしょ？
今野 男 そうですね。すいません。
今野 男 出てってよ。
今野 男 え？
今野 男 2人で話したいのよ。
今野 男 いや、それはちよつと。
今野 男 え？
今野 男 わかります。ただ：そうできれば、良いんですけど。
今野 男 無理なの？
今野 男 背後霊なので：
今野 男 ああ。
今野 男 離れちゃうと、それはただの幽霊になってしまうから。
今野 男 ：そういうもんなんだ。

男 そうなんです。背後霊なので。
今野 …横じゃん。
男 え？
今野 背後霊。今、横にいちやっってるじゃん。
男 あ。
今野 背後じゃないじゃん。
男 ある程度はまあ。
今野 横でもいけるんだ。
男 はい。
今野 へえ。
男 サイド霊。
今野 …。
男 なんちやって
今野 (被せて)じじい！
男 すいません。
今野 いや今のは良くないね僕もね。子供の前でね。たださ、
男 つまんない事言っついていい状況？いま？
男 ちょっと、和むかなど。
今野 …いいんだよ和まなくてまだ。問い詰めてる所なんだから。

男 はい。
今野 ； 見てたの？
男 ；
今野 聞いているんだけど。
男 あ、私？
今野 そう、見てたの？その、盗るところ。
男 ああ： 犯行の一部始終ですか。
今野 言い方。
男 ああ。
今野 「犯行」とか言わないで。
男 ； 出来心の一部始終。
今野 聞いたことないよ。
男 出来心だと思っんです。
今野 だと思っよ。
男 ええ。
今野 だと思ってるけど、それは本人に聞いてみないと。
男 ええ。
今野 だから、ちよっと黙っててくれる。
男 はい。お口、

今野 男 お口チャックですね。
今野 男 うん。
今野 男 (すぐく不器用にお口チャックをする)
今野 男 下手くそ。
今野 男 (無言でペコリ)
今野 男 ∴
今野 男 ∴
今野 男 ∴ 見てたの？
今野 男 ∴
今野 男 ∴ 盗るところ。
今野 男 ∴
今野 男 (うなづく)
今野 男 ただ、見てたの？
今野 男 ∴
今野 男 止める事もできたんじゃない？
今野 男 ∴
今野 男 いいよ。喋って。
男 (すぐく不器用にお口チャック開く)

今野 (下手だなあ)

男 お金は、払うのかと。

今野 払わずに外、出ようとしたんでしょ？

男 はい。

今野 なんかわんな変な雰囲気とかあったんじゃないの。

男 ええまあ。

今野 なんのために憑り付いてんのよ。

男 :

今野 こういう時のためじゃないの？

男 こういう時のためでは、ないです。

今野 じゃあなんだよ。

男 それは、自分でもよくわからなくて：ただ、しいて言うなら、

なんか心配だったの。

今野 心配？

男 はい。

今野 心配ならさ、尚更こういう時なんかしてあげるべきじゃないの？

男 それは背後霊の仕事じゃない。

今野 はあ？

男 それは、なんとかしてあげるのは、こうならないようにこの子を導いてあげ

るのは、地域の大人達の、学校の、親の役目だ。まだちゃんと生きている、この子と一緒に生きてあげられる人間の役目だ。

もう死んでいる我々が出来るのは後ろで見守る事だけだ。この子の背後かサイドで見守っている事だけなんだよ。そりゃ歯がゆいよ。心配なのに。心配だから憑いてるのに、結局自分では何もできない、してあげられないんだから。君達は何かしたのか？私と違って、何かしてあげられる君達は、ちゃんとこの子に何かしてあげてきたって言えるのか？

今野　：

男　　：

今野　急にちゃんと反論するなよ。

男　　：すいません。(すごく不器用にお口チャックをしめようと)

今野　いいよ、(しなくても)。

男　　(やっぱり開ける)

今野　急にペラペラペラペラ

男　　え？

今野　どの口が言うんだよ。自分はもうだったんだよ。

男　　：

今野　そういうあんたは、生きてるうちに、そういう事、ちゃんとやったのかよ！
男　　私は、

今野 俺はあんたに、何もしてもらった覚えはねえよ！サイドにも後ろにもいなか
っただろ！俺の！！じゃあせめて背中でも見せといてくれよ！
どこにもいなかかったじゃねえか！なんだ？見えなかっただけで、どっかで見守って
たのか？

男 すいません。

今野 ∷

男 父親として、何もしてやれなくて、申し訳なかった。

今野 ∷。

男 君がまだ小さいころ、家を出て行って∷それで勝手に死んでしまって、
本当に申し訳ない。すいませんでした。

今野 今更、別に謝ってほしいわけじゃないよ。わけじゃないけど∷

それで別に親戚とかでもないよそんちの子の背後霊になってるってのは一体どうい
う了見だよ！

男 え？

今野 え、じゃねえよ！とり憑くなら普通自分の子供のところじゃねえのかよ！

男 今の妻との間には子供がいなかったから、

今野 わしわい！

男 え？

今野 わしはお前の息子やろがい！

男 はい。

今野 どういう気持ちだったと思ってんだ！自分の死んだ親父が、教え子の背後霊になっってるの発見した時：

男 ：「怖い」？

今野 さすがにね！さすがにちょっとね！オバケだし！

男 幽霊だよ。でも、私だってよくわかってくれたね。

今野 ：写真は、よく見てたから。お袋は良い顔はしてなかったけど、別に捨ててもなかったし。

男 そうか：

今野 別に、いいけど。何をしようがそれは、あなたの人生だから。人生終わった後でも、何をしようが。

男 君は：立派になったから。

今野 え？

男 君は自分の夢も叶えて、立派になったから、何も心配してないから。

今野 ：

男 君のお母さんも強い人だから：

今野 うん。

男 私という人間の性分だな。他所の人の事ばかり世話を焼いてしまう。結局大したことはできないんだけど。：この子、迎えに来てもらう誰かにまず先生の、君

の名前を出したんだよ。それって、すごい信頼だよな。

今野　ありがとう。

男　え。

今野　俺の大事な生徒。心配してくれて。でも、大丈夫だから。なんとかするから。俺。だから、見守ってあげて。

男　：頼むな。

今野　うん：行こうか。お店の人に謝って、それから：一回学校戻るか。それで、話そう。その後は：それから決めよう。

立ち上がる生徒を気遣うように椅子を動かしてあげながら、

今野　ずっと先生一人で喋ったり怒鳴ったりしてて怖かったよな。ごめんな。

ドアに向かう生徒に合わせて、男も移動する。

出る直前、生徒の両肩に手を置き制止しようとする男。

今野　え？え？なんか操ろうとしてる？

男　違うよ。ちよっと止めてるだけ。

今野　なに？

男 母さん：こっそり病氣してたりしないか？

今野 ああ：たぶん大丈夫だよ。毎年健康診断受けてるし。あれ、今でも続けてるし。

男 あ、

2人 ウェイトリフティング。

今野 この前シニアの大会で120キロ上げてた。ジャークで：：
男 すごいな。良かった：よし、行こう。

今野 ああ、ちよっと忘れ物とか、片付けてから行くよ。

男、（生徒と）出て行く。

今野 ……さっきの止めるやつで、万引きした時止めてくれよ：あれ？

今野、男の座っていた椅子に何か見つける。

折りぐらゐに折りたたまれた紙。

広げると、かつて幼い今野が父に書いた似顔絵だった。

大小の丸を重ねたような絵の下に「おとうさん。」の拙い文字。
「。」は少し大きい。

おしまい